読み物

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2010年6月-2010年7月

英語で危機を意味するリスクは、元々狭い運河を航行する行為に由来していた。危機管理とナヴィゲーションの関係は、私の中でも融合・熟成していく。

■ハセツネへの長い道のり

6月1日

今年もハセツネフィニッシュへの長い道のりを始める日がやってきた。9時50分から携帯とPCの両方をスタンバイして待つ。そろそろ申し込みのトップ画面に接続しようとすると、本来10時からのエントリの3分前には、すでにつながらない状態だった。PCも何度か試み、つながりやすい携帯でもトライするが、あと一歩のところでその先に進めない。ようやく接続できた11時にはすでに定員に達してた。長いはずの道のりは、断崖になって突然終わっていた。

6月4日

忍野高原で今年初めて開催されるトレラン大会での、環境への影響調査を行った。約2時間半走って10個所以上の植生状態や土壌の硬度を測定する。また、レース時のごみ捨てがどの程度かを把握するために、眼についたごみを拾う。

この日は、そのまま三島で泊まり、翌5日は、同僚が講師を務める高校生を対象としたジオパーク研究に参加した。ジオパークとは、地質学的に価値ある景観を認定し、保護すると同時にガイドツアーを実施して、それに対する来訪者の関心を高めようというユネスコの認定事業である。今回対象の伊豆半島も近い将来、そこに名乗りを挙げる。

同僚は研究フィールドが伊豆だけあって、100万年を越える伊豆半島の形成史を目の前で見ていたかのように、具体的な数値や地名を交えて説明する。地図の代わりに生徒に渡された赤色立体図がまたすごい（画像をみるとそのすごさは一目瞭然なのであえて説明をしない）。僕らが長い時間をかけて培った地形判読スキルなど全く要らずに地形が直感的に見て取れる。このような地図が一般的になった時、読図スキルはどのように活用されるのだろうか。

6日は忍野高原トレランレースの事後調査を行った。コースの中央部は2000人以上の人が通過している。確かに踏み跡は濃くなっているし、S字カーブではショートカットによる複線化もみられる。その一方で、路傍の植生も土壌硬度もほとんど変化のない場所が多い。トレランレースには環境への影響がないとは言い切れないが、感情的な「トレラン環境破壊論」にも根拠が乏しいと分かる。データを積み重ねて議論することの重要性を感じる。

▲静岡消防の講習会。整置を使った方向維持の方法を教える。

■自然の中のリスク

6月9日

市内の学校での教員向けの危険認知の演習を行った。学校での不審者対応が一段落し、危険全体についての意識が高まっているのか、最近この手の依頼が多い。昨年の春に、それまでの学校保健法が学校保健安全法に改正されたことも一因のようだ。

演習自体は楽しんでもらえたようだが、彼らの危険に対する考え方に少しでもインパクトを与えられたのだろうかと思うと、やや心もとない。どうしたら、一緒に深める・深まっていく感じを持てるだろうか。そこに次なる課題が感じられる。

6月10日

ＪＲ大人の休日クラブ春季講習の最終日を飯能で実施した。場所にも慣れたので、講習もスムースに終わる。参加者の満足度も高い。だからこそ何か物足りないという気持ちもわき起こる。講習における次なる課題は、危機管理も読図も一緒かもしれない。

6月18日

県の社会教育施設として二つ目の指定管理者制度が敷かれた浜名湖の県立施設でボートが転覆し、中学生1名が死亡した。第一号の朝霧野外活動センターは、昨年までの3年間、外部評価委員長としてかかわった。同様の施設の一つにもかかわる可能性があっただけに人ごとではなかった。

事故にあったカッター訓練は、注意報が出ていた時間帯だった。対応規則では警報が出たらやらない、注意報なら利用者側との協議となる。学校での体験学習では、このような事態では、「実施」へと傾く可能性が少なからずある。もともと自然体験における困難の教育的価値を認めるからこそ、このようなプログラムを実施する訳だし、その中で「危険なほどの困難」と「困難」の境を一義的に決めることは容易ではない。

出航時から次第に風雨が強まったこと、カッターが転覆したのは風雨そのものではなく、モーターボートによる曳航のせいだと思える。とすれば、出航時に「危険なほどの困難」とは考えなかった判断自体は、あながち間違っているとは言えない。

事故当日のあるニュース番組は、「こんな天気で実施したのもどんなものですかね」、的なコメントを流していたが、心理学でいう「後付バイアス」による無責任なコメントである。困難を前提とする教育活動で、無謀かチャレンジかは一義的には決められない。マニュアルを整備し、それにしたがっていれば安心という考え方こそ、自然の中でもっとも危険な考え方だ。

6月20日

久しぶりに家で過ごす休日となった。午後は静岡の街に出た。一番の目的は好日山荘での山用品のチェックだったが、先ごろ完成した静岡で一番高い葵タワービルにできた静岡最大の面積を

誇る戸田書店に脚が向く。アウトドアコーナーに行くと平積みにしてある自費出版と思しき「安倍山系」というそっけない表紙の本を見つけた。悩んでいた来週の岳人取材場所もこれで決まり。

6 月 21 日

多くの小学校の５年生で、２泊３日の自然体験活動に出かける。普通は大きな事故は起こり得ないが、安全への意識が高まっている昨今、より安全に、というニーズは高い。昨年に引き続いて、自然体験の危険についての５年生対象の授業を引き受けた。５年生とは言え、小学生にどこまで危険の話が通じるだろう。そう思う気持ちが半分と、だからこそどうしたら彼らに危険の本質とそれに対する対処を伝えられるだろうかという気持ちが半分。毎年、自問自答しながらの授業である。自然は楽しい反面、事故の危険もあることは伝わったが、危険を予測する必要性と自分たちのかかわりによって危険が変化することを感想に書いてくれた子はごく少数だった。自然体験で生きる力を、というのはいまだスローガンに過ぎない。

6 月 25 日

富士山子どもの国、富士市林政課、富士森林組合に出かけ、９月のナヴィゲーション・サミットの渉外を片づけた。富士地区でオリエンテーリングをしている森の概ね半分は私有林で、残りも森林組合の管轄だが、もともと土着色の強くない土地柄なのか、森林組合でも、「歩くだけでしょ」「いや、走ったりもします」「いいんじゃないの」の二言で終わってしまった。ナヴィゲーションイベントの頂点を目指すこのイベントへの登山道が始まった。

6 月 28 日

岳人の取材で安倍山系の真富士から竜爪山をめぐる 12km を取材陣３人と歩いた。この日のテーマはコンパスの復権。先週読んだ平塚晶人さんの新刊で、あまりにコンパスと方向が無視されていて、不憫になった。初級者こそ、感覚に頼る地形の大きさじゃなくて、客観的かつ誰でもほぼ同じように把握できる方向を頼るべきじゃないだろうか？実際、モデルになった大学生は、地形の大きさの感覚は身に付かなかったが、方向の違いはある程度使えるようになった。そんなノウハウもオリエンテーリングをしていればこそだ。

■究極の地図

7 月 3 日

霧ヶ峰ロゲイニング前日講習も、今年で３回目となった。毎年 15 名程度の参加がある。一般のオリエンテーリング大会の初心者説明は、競技の説明に終始しがちである。前日講習とはいわないまでも、オリエンテーリング大会でも、もう少し競技についての講習を工夫すれば、運営者にとっても参加者にとっても得られるものがあると思う。

参加者の中には、ロゲイニングも登山も初めてのような若い女性もいた。彼／彼女らは失礼ながら意外と技術・知識の習得に関して直で熱心だ。最近の「山ガール」ブームは、意外と登山やアウトドア界の構造を変えるよいチャンスなのかもしれない。

翌 4 日は、霧ヶ峰ロゲイニング。主催者の木村君には「史上最強のシニア誕生！」と言われ、シニアクラスデビューを果たすが、ちょっとばかり後ろめたさもある。レース後風呂に入っていると、K さんから「あんまり私たちの楽しみを奪わないでください」といわれる。一方古くからの知り合い T さんには、「励みになります」と言われた。励みにさせてほしいのはこちらの方だが、そんな彼らの刺激に少しでもなれるものなら、それはそれで光栄なことだ。

7 月 7 日

同僚を通してアジア航測にお願いしていた富士山周辺のレーザー測量による等高線データと赤色立体図のデータが送られてきた。

富士山周辺では砂防・防災の関係でレーザースキャニングによる 1m メッシュの詳細な等高線データが作成されている。レーザー光では森があっても、葉の隙間から森を透過し、地表面の標高データを得ることができる。またその連続性からその標高が地表面と森の樹冠の高さのいずれかを区別できる。だからこそ正確な標高データが得られるのだ。

さらにアジア航測では、圧倒的な立体感を生みだす赤色立体図という表現手法を開発している（6 月 5 日の項参照）。その表現力たるや道路脇の 50cm 程度の段差が表現されている。

認知心理学の研究者としては、本当に素人でもリアルな凹凸が見てとれているのかとう点に興味があるし、地図作成もするオリエンティアとしては、赤色立体図を使えば、O-map の作成が著しく楽になるという期待もある。そこで、赤色立体図と等高線図それぞれの使い勝手を比較し、またリクリエーション利用の可能性を探るという研究テーマでデータの提供を受けた。

提供されたデータには、等高線図はもちろん、赤色立体図、さらにオルソ画像（空中写真から高さによる歪みを除いた画像）も含まれていた。等高線データにオルソ画像を載せ、地形図などを参考に道、建物や植生のデータを拾うことができる。その上に赤色立体図を重ねると、これまでの O-map の調査で苦労して記載していた微地形のほとんどは見て取ることができ、屋外でやるべきことは植生だけじゃないかと思うくらいだ。試しに 2000 のワールドカップで調査した勢子辻と比較してみると、苦労して拾い上げた微地形はすべて等高線か赤色立体図に表現されている。赤色立体図は究極の地図と言ってもよい。レーザースキャニングデータは地図作成の圧倒的な省力化につながることは間違いない。新しいおもちゃを与えられた子供のように、この地図で遊んでしまった。

（上）岳人で、モデルを務めた学生さんと
（中）霧ヶ峰ロゲイニングで阿闍梨大活躍
（下）霧ヶ峰前日講習。ナヴィゲーションへの関心を感じる。

■二つの研修

7 月 8 日

4 年前に静岡で行われた全国遭難対策協議会の懇親会の席上で、静岡消防の方から読図講習会をいつかお願いします、と言われた。その後好日山荘での講習会に個人的に何人かの隊員が訪

れることもあったが、組織的には音沙汰がなかた。それが、去年の遭難数倍増の影響か、この春静岡でも山岳救助隊が結成され、ナヴィゲーション講習の打診が来た。非番・当直明けを含めて希望者を募ったところ 100 名近い受講者があった。

複雑なナヴィゲーションと地図読みの話を実習もなしに３時間でやるのは無謀なのだが、手と体を動かす活動を取り入れたら、楽しく取り組んでくれた。スキルを商売道具とする彼らなので、「こんなの（尾根線と谷線の区別）は、１秒くらいで判断できるようになってください！消防活動だって、それが命に通じるでしょ」と煽る。

午後は東京に出かけ、山西会長とともに JOC を訪れる。来年１月にカザフスタンで行われる冬季アジア大会では、スキーO が採用されたが、残念ながら、日本からの選手派遣はないことが JOC 理事会で決定された。人口が少ないから、競技レベルが問題だから。理由はいくらでもつけられるが、そう簡単にあきらめられる話ではない。競技スポーツの世界なのだから楽な道ではない。後は私たちにそれを乗り越える気持ちがあるかどうかだ。

7 月 11 日

ほったらかしになっていた昨年のサマーチャレンジの撤収をちゃこと一緒にした。１年放置したが、牛乳の簡易フラッグのおよそ２／３は健在だった。設置されている丸火は人里に近いし利用者が多いので、紛失したフラッグがあるのは仕方ないだろう。風雨に１年さらされて健在なフラッグがあることに驚く。なんだ、二人でやれば丸１日もかからないじゃないか。もっとメンテナンスしよう。

7 月 17 日

もうひとつの山のプロフェショナル国際山岳認定医の研修で立山にいく。こんな機会でもなければ静岡空港を使うこともあるまい。冥土の土産に静岡から小松に飛んだ。空港建設には反対の立場だったが、身近な場所に空港があり、自分の住んでいる街の風景を空から眺めるのは悪くない。北欧のローカル空港を思い出させる牧歌的な景色が、むしろ非日常のわくわく感を醸し出している。

この講習は、山岳で活動できる技量を持った医者を認定しようという講習である。近年、ヘリによる救助も進んでいるが、ヘリが入れないが現場での緊急医療が必要な遭難者もいる。そんなとき救助隊と行動をともにするという考え方が根底にある。消防といい山岳認定医といい、自分の培ったスキルが明確な形で社会の役に立つ場面を経験できるのはうれしい。

研修を終えた足で野沢にやってきた。秋のロゲイニング世界選手権に向けて、マウンテントレイル in 野沢温泉に参加するためだ。65km、アップが 4000m ということでハセツネよりも距離は短いが上りはややきつめ。最近長い距離を走れていないので、レース前からやや消極的。

コースは野沢温泉にある五輪のバイアスロンに使われた競技場で、ファシリティーはかなりよいが、コースがねえ・・・。コースはループを４周する上、そのうちの一周は市街地である。つなぎの部分でスキー場とか舗装道路が多いのも難点だ。コースプランナーの田中正人何やってるの？

走ってみて意図が理解できた。街中の道路では日曜の朝は朝市が立っており、朝から温泉に入る人たちが買い物をしている。狭い路地に沿って市を出している地元の人や観光客に応援してもらいながらのレースなのだ。しかも、地元のおばちゃんが、「ガンバ！」と応援してくれる。応援慣れしていないと出ない言葉だろう。野沢温泉といえば複合の荻原兄弟が練習を積んだ場所。スポーツを日常的に応援する文化が根付いている。

４週目のループはスキー場の管理道や舗装道路を、前半延々と上る。「これも正人らしいきついだけのコース」と思っていたが、上がってからの高原のブナ林のトレイルが素晴らしかった。最後の下り数 km も、比較的走りやすいトレイルが続く。魅力ある部分を 30km くらいにコンパクトにまとめたコースを提供したら、トレランの底辺拡大にも貢献できるのではないか、いっそスキー場のゴンドラを運航して、1600m の毛無山の山頂からダウンヒルレースなんていうのはどう？なーんて、レース後の反省はついつい運営者目線。

7 月 21 日

体育の授業で着衣水泳と救命救助ゲームをやってみた。始めた当時は着衣水泳の経験率が 20%くらいだったが、現在では８割を越えた。100%になるまでは続けたい。

救助訓練は野外では必須スキルだが、学生の興味を喚起するためにチーム対抗のゲーム形式とした。プールでおぼれていると想定した人を５ｍラインに立たせ、チーム３名で救助するものだ。ルールは、水に入ってはいけない（これは一般の人による水難救助では強調されている）、したがって、ロープとペットボトルで簡易救助具を作らなければならない。後のルールとしては、プールから引き上げる時、おぼれている人は自力を使ってはいけない、というのも加えた。

ロープとペットボトルで簡易救助具ができることは周知のようだ、実際にやってみるとたった５ｍ先でも、要救助者にうまく投げるのは難しい。前半のグループの失敗を見ていた後半では、水を少量入れるなどの工夫をしていた。投げた途端にロープの結び目が解けてしまい、にっちもさっちもいかなくなったグループもあった。これが現実だったら、見殺しだ。

プールサイドにひき上げるのも難しかった。ここだけは水中に入っていいというルールにしたが、後ろから押しても、腕を持って引き上げるのは容易ではない。やってみて初めて記憶に残ることだ。僕自身よい教訓になった。

7 月 26 日

地元のスポーツショップのトレラン部主将望月将悟さん（ちなみに僕は監督）のトランスジャパンの壮行会。乾杯の音頭という監督らしいことを、初めてした。

前回 2008 年大会のゴールには、ＴＴＲで亡くなられた 2006 年の完走者の高橋さんのご両親が献身的なサポートをされていた。手づくりのフィニッシュ横断幕に向かって選手がゴールする様に胸が熱くなると同時に、静岡の関係者がそこにいないことに一抹の寂しさを感じていた。

今回は違う。将悟さんが参加、おそらくトレラン部のランナーも、静岡消防の人たちも大勢応援にいくだろう。正気の沙汰とは思えない冒険に赴く勇者たちが、静岡を目指して走る、そう思うだけでワクワクする。

▲野沢温泉トレイルランニング。（上）温泉の足湯でつかの間のスローライフ、（下）５０歳代の部で３位。優勝は 57 歳の方。若いんだから頑張れと言われる